

令和7年度 第2回八戸産学官連携推進会議 議事録

日時 令和8年2月5日(木) 10:00～

場所 八戸市庁本館3階 第一委員会室

○司会(小笠原政策推進課長)

ただいまから、「令和7年度 第2回八戸産学官連携推進会議」を開催いたします。はじめに、本日お配りした会議資料を確認させていただきます。

本日の会議資料は、

- ・ 次第
- ・ 八戸産学官連携推進会議名簿
- ・ 席図
- ・ 資料1：令和7年度産学官連携事業の実績
- ・ 資料2：令和8年度産学官連携事業(案)
- ・ 参考資料1：外国人セミナーアンケート結果
- ・ 参考資料2：八戸市の0～18歳人口

となります。過不足等はございませんでしょうか。

それでは、開会にあたり、会長の熊谷市長より御挨拶いたします。熊谷市長よろしく願いいたします。

○熊谷会長(八戸市長)

おはようございます。御多用のところお集まりいただきまして、ありがとうございます。また、日頃より、この会議に御理解と御協力いただいておりますことに感謝申し上げます。

昨年度から会議内に事業検討部会を設置し、様々な事業を行っておりますが、今年度は「八戸若者力形成インターンシップ」事業や「高等教育機関・市内企業PR事業」などに取り組んでおり、これらは産学官の連携をさらに加速させるとともに、地域社会と若者の架け橋となるものであり、非常に意義深いものと考えております。

一方で、本市を取り巻く環境はいろいろと変化をしておりますことから、行政だけではなく教育界、産業界、地域社会と互いに知恵を出し合い、挑戦していくことが大事だと考えております。

本日は限られた時間ではありますが、忌憚のない御意見を賜りますようお願い申し上げます。冒頭の御挨拶といたします。よろしくお願いいたします。

○司会(小笠原政策推進課長)

ありがとうございました。それでは、議事に入りますので、熊谷市長に進行をお願いいたします。

○熊谷会長(八戸市長)

それでは、しばらくの間、議長を務めさせていただきます。まず、「案件(1) 令和7年度産

学官連携事業の実績」について、事務局から説明をお願いします。

○事務局（見付 GL）

政策推進課の見付と申します。よろしくお願いします。着座にて説明させていただきます。

それでは、「令和7年度産学官連携事業の実績」について、御説明いたします。資料1の2ページを御覧ください。目次となっておりますが、こちらの6つの事業につきましては、今年度から国の地方創生予算をいただきながら、産学官連携事業として実施をしているものでございます。「八戸地域学」については令和4年度から実施しておりますが、ほかは令和7年度から実施をしているというものになります。

「八戸地域学」

3ページを御覧ください。まずは、「八戸地域学」でございます。文化、地域の産業等を学び、地域への理解や愛着の醸成を図ることで、若者の地元定着につなげていくことを目的に、各高等教育機関共通の講義として、令和4年度より実施しているものでございます。

第1回講義は、八戸学院大学 小林学長を講師に、10月29日、八戸高専において「八戸のまちの可能性について考えてきたこと」をテーマに実施していただきました。第2回講義は、ヴァンラーレ八戸 下平代表取締役社長を講師に、11月17日、八戸学院大学で開催しまして、「地域に必要とされ、役に立ち、愛されるクラブへ」をテーマに講義をしていただいております。第3回講義は、デューリー東北株式会社 広瀬代表取締役社長を講師に、12月10日、八戸工業大学で開催しており、「北奥羽開発運動と八戸」をテーマに実施されました。

今年度は全3回の講義を実施し、それぞれの高等教育機関で延べ530人、今現在で聴講をしていただいているという現状でございます。これらの講義につきましても、すでに各講義は配信をしておりますが、市のホームページや市のYouTubeにも順次掲載をして、市民の皆様にも御覧いただけるよう公開してまいりたいと考えております。

「長期実践型インターンシップ」

4ページを御覧ください。「長期実践型インターンシップ」でございます。本事業は令和7年度から実施し、学生が市内企業で約1か月間の実務体験や企画提案を行う、伴走支援型のインターンシップ事業であり、若者の地元企業を知る機会の創出と地元企業の採用活動強化を目的に実施しております。

夏休みの期間に市外から学生7名を受け入れまして、(株)ヴァンラーレ八戸、(株)金入、近田会計事務所において実施をしていただきました。ヴァンラーレ八戸では3名の学生を受け入れ、ホーム戦5000人集客を目標とする企画を考えていただきました。実際は、ナイターということもあったんですが、3300~3400人ぐらいの集客ということになりました。金入さんでは2名の学生を受け入れまして、新たな購買体験の提案や店づくり、商品構成に関するアイデアを企画・立案していただきまして、はっちにある金入にて商品の販売も実際に体験をしていただきました。近田会計事務所では2名の学生を受け入れ、地域企業の新規事業開発や組織改革等に関する企画提案が行われました。インターンシップ最終日の成果発表会では、学生からインターン活動の成果について発表していただき、大変充実したインターンシップになったことが伺えました。また、受け入れた企業の社員にも参加していただきましたので、企業にとっても新たな視点を獲得する機会になったと感じております。

「若手社員基礎力向上・職場定着セミナー」

次に、5 ページを御覧ください。「若手社員基礎力向上・職場定着セミナー」でございます。本事業は、市内企業の若手社員を対象に、コミュニケーション能力や問題解決力などの基礎的なビジネススキルの向上を図り、仕事への意識を高めることで、離職防止と職場定着につなげることを目的として実施しております。

今年度は、全4回のうち2回実施しており、9月3、4日の2日間で計34名に参加いただいております。後期セミナーとなる残りの2回については、2月18、19日での開催を予定しております。

「高等教育機関・市内企業 PR 事業」

6 ページを御覧ください。「高等教育機関・市内企業 PR 事業」でございます。本事業は、市内高等教育機関および市内企業の取組や魅力について、商業施設等を活用し、広く市民や来訪者に情報発信を行うものでございます。

今年度は、イオンモール下田の30周年記念事業とタイアップいたしまして、11、12月の2か月間、イオンモール下田内に各高等教育機関のポスターやバナーを設置いたしましたのと、西コートでのイベントも実施をしていただきました。八戸高専におきましては11月2日に、商工会議所におきましては11月15、16日、八学大・八学短大におかれましては12月6日、八工大におかれましては12月13、14日に、それぞれPRイベントを実施していただきまして、モノづくり体験や健康測定会等による高等教育機関の紹介や、物販、試食による市内企業のPRを実施したところでございます。

「外国人材受入セミナー」

7 ページを御覧ください。「外国人材受入セミナー」でございます。本事業は、人手不足の影響を受ける市内企業に対して、これまでの日本人採用に加え、外国人材の雇用について考える機会とするため、外国人雇用を検討している企業を対象に、雇用方法や制度説明等の「外国人雇用の入口」となるセミナーを開催するものでございます。

また、高等教育機関が取り組む外国人留学生に係る取組を市内企業に周知することで、市内企業の外国人材活用及び高等教育機関の外国人留学生の定着を促進し、市内企業の人手不足の解消を図ってまいりたいと考えているものでございます。今年度は、第1部で国立社会保障・人口問題研究所の是川 夕氏を講師として、「外国人材と地域社会の持続可能性」をテーマに基調講演をいただきまして、第2部ではパネルディスカッションを開催し、実際に外国人労働者を雇用している市内企業の代表からは、外国人労働者を雇うことになった経緯や苦労している点などの雇用主側の目線を。実際に八戸市で働いている外国人労働者からは、八戸市の魅力や困っていることなどの働く側の目線をそれぞれ発表いただきまして、会場全体で外国人労働者についての理解を深めることができたものでございます。また、八工大で取り組まれている特定技能エンジニアプログラムや青森県庁の外国人相談窓口などの各種施策も共有いたしまして、市内企業への周知を図りました。

なお、今年度のセミナー参加者からのアンケート結果につきましては、お手元に報告書としてお配りしておりますので、後ほど御覧いただければと思います。

「はちのへ企業魅力発信×発見フェア」

8 ページを御覧ください。「はちのへ企業魅力発信×発見フェア」でございます。本事業は、

高校生や大学生等を対象に、市内企業の製品や技術、仕事体験の機会を提供することで、市内企業の認知度向上と将来的な人材確保につなげることを目的として実施したものでございます。

令和7年度は、9月13日(土)に八戸プラザホテルにおきまして開催し、189名に参加していただきました。企業43社に仕事体験や製作体験ブースを出展いただいたほか、就職に関するトークセッションや保護者を対象にしたセミナー開催も実施をしたところでございます。

以上が、今年度実施した産学官連携事業の実績報告になります。

○熊谷会長（八戸市長）

ただいまの説明に対しまして御質問、御意見等ございませんでしょうか。

○武輪副会長（八戸商工会議所 会頭）

「外国人材受入セミナー」は、令和6年度も開催したような記憶をしていたのですが、別枠でしょうか。

○事務局（見付 GL）

令和6年度は商工会議所の事業としてやっていただいております、今年度は産学官連携事業という枠組みの中で実施をしたということでは初めての開催ということになります。

○武輪副会長（八戸商工会議所 会頭）

わかりました。

○熊谷会長（八戸市長）

ほかにございませんでしょうか。

○土屋委員（八戸工業高等専門学校 校長）

すごく魅力的な取組をしておりますし、夏のときにいろんな意見が出た中からこの取組というのは、それに対するある種の答えという形でやられていて、すごくいい取組をしているんだなということはよく理解したんですけれども、1つは「長期実践型インターンシップ」。地元企業の1か月間行って、いろいろ勉強できるというのはいい機会だと思うんですけど、参加者が7名、参加会社が3社ですね。もう1つ、先ほどの武輪会頭からもあった「外国人材受入セミナー」の出席者が40名です。すごくいい反響のアンケート結果が出ているんだけど、参加者が40名ということで、もうちょっとプログラムのコンテンツはいいので、参加企業や参加者が増えるっていうことができればいいなと思うんですけど。やっぱりちょっとまだ情報の共有が足りてないところがあるということなんですか。

○商工会議所 原課長

令和6年度はですね、商工会議所が単独で開催をさせていただきまして、そのときには100名ぐらいの参加がございました。昨年12月は2回目のような形ではありますし、地震があったあとということもありなのかもしれませんが、若干事業者の出足が鈍ったかなというところでございます。

○土屋委員（八戸工業高等専門学校 校長）

わかりました。インターンシップの方はどうですか。

○事務局（見付 GL）

インターンシップに関しては、当初の説明では10名の学生を受け入れますという説明をさせていただいて、うち5名は市内の学生、5名は市外ということで募集をしたんですが、ちょっとスタートが遅くなったというんでしょうか。8月実施に向けて募集開始したのが5～6月っていうところもあって、八戸学院大学も興味を持った学生とか八工大もいらっしまったんですが、どうしてもバイトが入っているとかいうこともありましたので、そこを踏まえて、もう今から来年度に向けてはスタートさせているというところもあります。

○土屋委員（八戸工業高等専門学校 校長）

そうですね。5～6月だと、ほとんど対象学年は夏の予定を大体決めているかと思うので、3月からそろそろしだして4月には大体決まるような感じを私も持っていますので、早め早めに。あと、もうちょっと受け入れ企業さんが増えるといいなという感じがしますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局（見付 GL）

わかりました。ありがとうございます。

○熊谷会長（八戸市長）

はい、金子委員。

○金子委員（八戸工業大学 学長補佐）

今の「長期実践型インターンシップ」ですけど、すごくいい取組でたくさん参加すればいいなと思いますけど、やっぱり1か月間行くというのはハードルが高くて。どの1か月、どこに設定すればというのもあって、なかなかスケジュール的には難しいなと思うのと、市外からの人が多いですけど、どこから来ているのかなど。関東の人たちですか。

○事務局（見付 GL）

関東の学生多かったですね。京都からも1名ほどいらっしまったんですが、ほか6名は関東でした。

○金子委員（八戸工業大学 学長補佐）

逆に言うと、その人たちはどのように情報を収集して、どうやってスケジュール調整してくるのか考えないといけない。最初からそういうのに興味があって、いろいろ調べている子たちっていうことですかね。

○事務局（見付 GL）

一応、学生にいろいろと話を来た際に聞いたんですが、やはり夏休みは長期でインターンシップに行きたいということで、常に情報を取っているような学生がやっぱり多いかなと思いますね。

○金子委員（八戸工業大学 学長補佐）

増やしていくには、うちの方でも学事歴の調整とかいろいろカリキュラムの中にどうやって組み込むとかいろいろ検討はしているので、少しずつは増やせるかなとは思いますが、このやり方だとバツと増やすには難しい。やっぱり 10 人とかって感じになるのかなというイメージですね。もうちょっとライトなやつがあると、もうちょっと数は増やせるのかなと思います。

あと、外国人の話ですけど、今紹介してもらいましたが、特定技能エンジニアプログラムをやって 2 年目ぐらいになりますけど、八戸で大きな一番の課題かなと思うのは、支援機関。支援機関がやっぱり間に入らないと企業にこうやっていけないんですけど、その支援機関がなかなか育っていないんじゃないかなという懸念があります、地元の支援機関ですね。なので、そういう支援機関を育てていくというようなことも、うまく外国人材を使うという話であれば大事なのかなというふうにこの頃感じております。以上です。

○熊谷会長（八戸市長）

ありがとうございます。ほかにございませんでしょうか。

それでは、引き続きまして、「案件（2）令和 8 年度産学官連携事業（案）」について、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局（見付 GL）

それでは、「令和 8 年度産学官連携事業（案）」について、御説明いたします。資料 2 を御覧ください。本資料に記載しております事業は、令和 8 年度当初予算への計上を前提とした事業案であり、現時点では事業実施を確約するものではなく、今後、関係者との協議等により内容が変更となる可能性がある点について、あらかじめ御了承いただければと思います。

2 ページを御覧ください。令和 8 年度は、今年度を実施した事業に 2 事業を加えた 8 つの事業に取り組んでまいりたいと考えております。先ほどもありましたインターンシップに関しては、長期とライトにというんでしょうか、もうちょっと気軽に参加できるようなこともイメージをして、8 番目に記載をさせていただいているんですが、もうちょっと短い期間で参加できるようなインターンシップも検討してまいりたいと思っております。

「八戸地域学」

それでは、3 ページを御覧ください。「八戸地域学」でございます。令和 8 年度に 3 回実施をしていきたいと考えております。時期につきましては、10 月から 12 月の間にということで、これまでと同様に考えております。会場につきましても今年度と同じ八戸学院大学、工業大学、高専、それぞれの会場で 1 回ずつ実施をしていきたいと思っております。講師につきましては、今後事業検討部会の中で相談しながら決定をしてまいりたいと思っております。

こちら「地域学」に関しては、令和 4 年度から 3 回ずつ実施をしておりまして、来年度で全 15 コマまで完成をする予定となっております。当初からですね、地域学に関しては 15 コマまでは実施をするということで進めてまいりましたので、令和 9 年度以降の地域学の実施方法につきましては、また来年度の事業検討部会の中で協議をしていきたいと思っております。これまでのように講義形式がいいのか、例えば高専からもいただいておりますがフィールド型っていうんでしょうか、まあそういうふうなものでもいいのか。いろんな企業さんから講義してい

ただいた方がいいのかとか。そういうのをまた来年度かけて検討して、令和9年度の実施につなげてまいりたいと思っております。

本事業は、地域の歴史や文化、地域の産業等を学び、地域への理解や愛着の醸成を図ることで、若者の地元定着につなげていくことを目的に、各高等教育機関共通の講義として、令和4年度より実施しているものでございます。1コマ1講義、計15コマ分の講義を一区切りとして、今年度も3コマ分の講義を実施いたします。

令和8年度の実施時期は、10月～12月を予定しており、昨年度に引き続き、市内高等教育機関を会場に実施したいと考えております。講師につきましては、今後事業検討部会において議論してまいります。また、地域学の今後につきまして、令和8年度の3回をもって全15回の講義が完成する予定であり、令和9年度以降の継続や実施方法についても検討していく考えでございます。

「長期実践型インターンシップ」

続きまして、4ページを御覧ください。「長期実践型インターンシップ」でございます。今年度の実施を踏まえましてですね、少し見直しを図ってまいりたいと思っております。今年度は、学生の地元定着ということと地元企業の採用力強化ということを目的に実施をしておりますが、どうしても学生が1年生、2年生が参加される学生が多いというところもありますので、時間軸の目標をある程度設定をしながら考えていきたいなと思っております。

短期目標ということであれば、地元の企業を深く知る機会という事と、あとは学生にとってのキャリア形成というところが短期の目標となるのかなと考えております。中期目標、これは1年ぐらいのスパンという感じになりますが、実際に1か月八戸で暮らしていただくことで、もし首都圏から来た学生さんということになれば関係人口の創出というところと、今年度もそうだったんですが、インターンしてこの企業に入りたいと思っているっていう学生もおりましたので、そういうところにつなげていくような取組にもなっていくかなと思います。長期的な視点で考えると企業の採用の活動強化、インターンシップを今度は自分たちで受け入れていくことで採用に向けて強化をしていくということと、就職の促進、地元定着の促進というところにつなげてまいりたいなと考えております。

実施内容につきましては、また夏休みの期間で実施をしていきたいと思いますが、こちら今受け負っているバリューシフトさんとも調整中で、概ね1か月間ということは想定しているんですが、場合によっては3週間とか、その辺も柔軟に検討していきながらやっていきたいと思っております。

あとはですね、市内出身者の学生を増やしていくということを目指しておりますので、すでにバリューシフトさんには工大とか学院大の方に出向いて学生にアプローチをしていたということと、首都圏に関しては、首都圏にいる八戸出身の学生のグループみたいなものもありますので、そういうところにこうアプローチをしながらですね、市内の出身者の学生を増やしていくことをやっていきたいなと思っております。

「若手社員基礎力向上・職場定着セミナー」

続きまして、5ページになります。「若手社員基礎力向上・職場定着セミナー」でございます。こちら今年度に引き続き実施をして、若手社員のビジネススキル向上と職場定着を目的として実施をしていきたいと思っております。令和8年度は前期2回、後期2回の計4回の開催

を想定しておりまして、主要なテーマについては今後調整してまいります。概ね社会人経験3年未満の社員を対象に、参加者主体のワークショップ形式を基本として、実践的な内容とすることで仕事への意識を高め、離職の防止と定着につなげてまいりたいと考えております。

「高等教育機関・市内企業PR事業」

6ページを御覧ください。「高等教育機関・市内企業PR事業」でございます。こちらにつきましては、今年度イオンモール下田の30周年とタイアップしたということで実施をしてまいりましたが、来年度はそのイベントがないので既存のPRイベント等活用していきたいなと思っておりますが、今想定しているのは、今年度実施した「はちのへ企業魅力発信・発見フェア」。こちらに市内高等教育機関のブースを出展していただくことでPRが図れないかと考えているものでございます。出展にあたりましては今年度と同様に、出展費用の一部を推進会議の方から支援をしていきたいなと考えております。

「外国人材受入セミナー」

続きまして、7ページを御覧ください。「外国人材受入セミナー」でございます。本事業につきましては、セミナーの内容は未定としておりますが、今年度の参加者アンケートの結果を踏まえて、市内企業のニーズに即した内容となるように講演内容や構成を検討して実施をしていきたいなと思っております。今年度は12月と開催ということだったんですが、企業の皆様も比較的忙しい時期ということもあったので、その時期も含めて検討していきたいなと思っております。

「はちのへ企業魅力発信×発見フェア」

8ページを御覧いただきたいと思えます。「はちのへ企業魅力発信×発見フェア」でございます。高校生や大学生等を対象に、市内企業の製品や技術、仕事体験の機会を提供することで、将来的な人材確保につなげることを目的として実施していきたいと思えます。

令和8年度の日時や会場は現在調整中ではありますが、例えば高校生などの授業の一環としての来場していただくなど、参加者数の増加に向けて、例えば今年度は1日の開催だったものを複数日にするとか、そのあたり参加者のニーズに即して検討してまいりたいなと思っております。会場とかもですね、候補としてはプラザホテルとかYSアリーナ八戸が候補に挙がっていますが、そこも含めて検討していきたいなと思っております。

「(仮称)産学官連携Uターン事業」

9ページを御覧ください。「(仮称)産学官連携Uターン事業」ということで、こちら新規の事業を検討しているものでございます。こちらの本事業は、UIJターンの促進や地元へのUターンを検討している市内高等教育機関出身の首都圏在住者に対して、首都圏で企業の紹介や移住相談を実施するというものでございます。こちらですね、首都圏の各大学の同窓会機能を活用して実施をしていきたいなと思っております。実施の時期につきましては、10月から11月ぐらいを今想定しておりますが、ターゲットとしては20代後半から40代で、初年度の来年度は、八戸学院大学と八戸学院短期大学部を対象に実施をしていきたいなと思っております。それも踏まえて、次年度以降は八戸工業大学とか八戸高専の方にもですね、実施できるように検討していきたいなと思っております。

「(仮称)インターンシップ受入企業支援」

最後に 10 ページを御覧ください。こちら「(仮称)インターンシップ受入企業支援」でございます。こちらの事業は、市内企業の採用力強化を目的に、インターンシップを実施していない企業へのプログラム作成の支援とすでに実施している企業へのプログラム強化にかかる支援を実施して、市内企業への就職機会の創出と就職後のミスマッチによる早期離職の防止を図っていきたいと思っております。令和 8 年度につきましては、市内企業対象にインターンシップに関するセミナーの開催と伴走支援を実施して、実際に令和 9 年度からの受け入れに向けて準備を進めてまいりたいと考えております。

説明に関しては以上となります。

○熊谷会長（八戸市長）

ただいまの説明に対しまして、御質問や御意見等ございますでしょうか。

○土屋委員（八戸工業高等専門学校 校長）

今年、下田でやったイベントはやっぱり圧倒的な集客力があって、すごく盛況だったなというふうに私自身思っているんですけど、これは 30 周年というのは聞いていたんですが、あのイベント会場とかあの周辺の感じだとなんか毎年できそうな感じを受けたんですけど、やっぱり 1 年限りですかね。

○事務局（見付 GL）

30 周年というのがあって、西コートのイベントの貸出料が無料っていうことでやれたっていうのもあるので、西コートの貸出料がいくらぐらいになるか。

○土屋委員（八戸工業高等専門学校 校長）

あれが無料だったというのが大きな魅力だったわけですか。それは交渉するとまた無料になるというわけにはいかないのかな。

○事務局（見付 GL）

交渉の余地はあるかもしれませんが、ちょっとそこは一旦イオンさんの方にも確認はしてみたいなと思います。

○土屋委員（八戸工業高等専門学校 校長）

やっぱり人は大勢来ますよね、集まりますよね。いろんな広告もずっとあるから、すごく広告効果は高かったなというふうに思いましたけど。

○熊谷会長（八戸市長）

はい、どうぞ。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

予算はどれぐらいかかっていますか、全部で。

○事務局（見付 GL）

全部で 2000 万円。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

2000 万、全部国費だけで。

○事務局（見付 GL）

半分が国費で 1000 万円。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

残りの地方創生交付金は国の当初予算の分だけ。補正はなかったの。

○事務局（見付 GL）

補正もあるんですが、その財源をどう振り分けるかは、もう内閣の方で決めてしまう感じですよ。トータルで補正と当初で大体 3000 億円の中で事業採択するみたいな。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

一番金がかかったのがインターンシップでしたっけ。

○事務局（見付 GL）

長期のインターンシップですね。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

いずれにしても国のお金も当てにしないわけですよ。

○事務局（見付 GL）

そうです。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

国の来年度予算がどうなるかわからない状況で、今総選挙やってるけど、まあどういうふうな体制になるかは別として、仮に高市政権が勝つとすると、予算の編成の仕方を変えて言っているじゃないですか。いわゆる補正に頼らずに、年度跨ったような形でやっていくっていう基本方針があるのと、それから、何にこれから予算を配っていくのかがはっきりしないところありますよね。地方創生交付金っていうのは、まあ何でもあり的なところがあるから何でもやれるところあるんだけど、そういう部分がこれからよりどっちに傾くかによって、まさに当初予算ですから、この 8 年度の事業を一体できるのかどうかってのはそっちを見てみないとわからない部分はどうしても出てきますよね。

○事務局（見付 GL）

そうですね。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

これから長期になっていくということになると、より実際は本当はやりやすくなる可能性はあります、その中でこうに使えるなっていうのが出てくると。今はそれを見ながら、ど

うしても年度半ばを過ぎたぐらいに実際に事業にかからなきゃいけないっていうのが、もう当初から、それこそ4月から仕事が出てくるような感じに変わってくると思うので、そこはこう少しく見ておいたほうがいいというか、長期的に事業計画立てるといいんだけど。今年はちょっとそのわからない部分がどうしてもあるから、引き続き去年の時間的なタイミングっていうのはどうしてもしょうがない。これは別に八戸市に限ったことではないけれども、という部分があるのではないかなと思うんですね。

Uターンの関係で、東京行って同窓会情報でターゲット絞って引っ張ってこいっていうのは、これはなかなか面白いかもしれないですね。どっかでやっているんだっけ。

○事務局（見付 GL）

これは全くの新規のものになります。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

どこかを真似たわけではない。

○事務局（見付 GL）

どこかを真似たわけじゃないです。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

早期退職がすごく多いじゃないですか。だからそういう今の状況を考えるとすごくいいんじゃないかなと思うんですね。東京いいと思って、給料高いと思って行ったけど、全然楽しくないでしょうっていう。八戸楽しいよっていうのは今まであまりなかった取組なので、うまくいけばいいのかなという感じはします。

ちょっとまたしゃべりすぎみたいになっちゃうけど、八戸で UJ ターンしている若い人って結構実際いますよね。いろんなことやっている人たちがいるんだけど、そういう人たちからこう声集めてみるっていうのもちょっとあってもいいような感じが。なんで八戸来たのとかね。まあ親戚がいるからだったりなんだろうかもしれないけど。それを元にこういうこともあるかなっていうことを調べてみるのも、今回の事業計画の中には入ってないですけど。結構いるんですよ、実際。飲み屋でしか会わないけど。話を聞いてみると、ほかから来た人が若い人でいたりするんで。そういう人をどういうふうに見つけてくるかはわかりませんが、来るに至ったきっかけだったり、現状だったりを知りたい。あるいは行政に対する要望とかあるかもしれないんで、その辺を聞いてみるっていうのも参考になるんじゃないかなっていう感じがします。とりあえず、以上です。

○熊谷会長（八戸市長）

ありがとうございます。ほかにございませんでしょうか。はい、お願いします。

○土屋委員（八戸工業高等専門学校 校長）

私も、同窓会組織をつかって UJ ターンを促進してみるのは非常に良いアイデアかなと思います。うちの高専では財団をつくってそういう事業を今までやってきて、そのときの目論見は、シニア世代が親の介護などいろいろなことがあって八戸に戻ってきたい。その

窓口があればいいなというのが、我々としての最初の問題意識とニーズだったんですが、実際蓋を開けてみると、かなり若年層、20～30代前半の転職希望の人がその制度を使っている情報を取りたいと問い合わせが来ているんですね。先ほど小林先生言ったように、やっぱり東京に行ってみたいなと思ったんだけど、なんとなく具合悪いな、戻りたいなと思う若年層が結構いるんじゃないかと私は思っている。我々と思いと違う、シニアじゃなかったの。それはそれでいいんですけど、かなり若いところに焦点を絞るというのも1つの作戦なんじゃないかなと。なんとなくイメージはシニア層が戻りたいと思うかなと思うんですけど、我々のところのデータは若い世代が手を挙げてきているので。若い世代も途中の仙台とかで止まっちゃったりするんですけど、それを引っ張ってくる仕組み。それで若い人で活躍されている方がいらっしゃるじゃないですか。そういう人たち、同世代の話を聞かせるというのはすごい効果的じゃないかなというふうに思います。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

ついでに余計な話をすると、ラウンドワンを誘致すると効果があるという。エネオスの八戸の初代社長の松田さんがずっと喋っていたんですよ。この前突然訪ねてきて。若い人を呼び込むにあたって一回確かやっているんだよな、来ませんか。それであっさり断られてそれで諦めて。結構効果があるみたいです。この前も来て、ラウンドワン効果あるよって話をしていたんで、つい思い出したんで。

○事務局（見付 GL）

若者にアンケートをとっても絶対出てきます、ラウンドワンやコストコが欲しいというのは。

○熊谷会長（八戸市長）

市長への手紙でも出てきます。同窓会組織というのは、若い人も多いんですよね。積極的に出てくる人は若い人が多くないですか。私も何回か自分のところの組織に入っているんだけど、そこで入って話していると、やっぱり帰りたいなという声が出てくるんですね。帰りたいし帰らなきゃいけないんだけど、けどもやっぱり働く場所がないというのが全国共通の問題。これは非常に、我々が提案して言うのもなんだけれども、真似したわけじゃないけども、どこかでやっていたような気も。参考になる事例もあるかもしれません。

ほかにございませんでしょうか。よろしいですか。それでは、令和8年度産学官連携事業については、案のとおり進めてまいりたいと思います。以上でこの案件を終わります。

次に、「その他」となりますが、ここでは意見交換に入ってまいりたいと思います。当会議の今年度の取組実績及び、来年度の連携事業（案）は先ほど事務局から説明のあったとおりですが、来年度に向けて、取組内容や今後産学官で取り組んだ方が良い事業について、また、その他の内容も含めて忌憚のない御意見をいただければと思います。

始めに、土屋校長より事前に申し出がありましたので、土屋校長よりお願いいたします。

○土屋委員（八戸工業高等専門学校 校長）

この会議、いろんな自由な討論ができるようになってきましたし、それからこういういろんな計画が実際出てきて進んでいるということで、ものすごくアクティブになってきたなというふうに実感しております。それを踏まえて、新たに御検討いただきたいなと思っていることがございます。

1つは、ふるさと納税の件でございます。先週、全国の高専の校長会議が東京でございまして、そこでふるさと納税のことがすごく話題になりました。である高専はですね、昨年度、ふるさと納税で7000万円を集めたということを言っていました。それからもう1つは、企業版ふるさと納税は9割控除されるという制度になっているということで、それで研究費を高専で集めて、企業側としてはそれで税控除もできているということで。八戸の企業が八戸の学校に納税しても控除されないんですけど、外の企業が持ってくると控除されるという制度らしいんですが、いずれにしろ個人からのふるさと納税、企業版ふるさと納税、これの受け皿で高等教育機関に対する支援。それこそ同窓生の人がですね、うちの学校、出た学校支援したいとかっていう思いがあるかもしれないので、その受け皿をですね作っていただくことを御検討いただければなというふうに思っています。全国ではそれなりにお金を集めている高専もあるという実態を聞いてきましたので、御検討いただければなと思います。それが1点です。

もう1点はですね、外国人の留学生に対する奨学金制度を作りたいということで、我々の方も企業回りをしている、そのニーズであるとか問題点だとかっていうのは洗い出しをしてきました。手を挙げたいという企業さんもございます。いわゆる紐付き奨学金で、一定期間勤めてもらったら返済を免除するという制度なんですけれども、やってみようかなという企業さんも、関心を持つ企業さんもいくつかあるというのは、我々企業回りをさせていただくコーディネーターの方から聞いてはおります。このあたりの外国人の受け入れ、関心もあるっていうデータも出てきていますので、具体的にどうやってその外国人をよりよく受け入れていくのか、いろんな策を検討する場を考えていただいてもいいかなと思います。

1つは奨学金制度、1つは外国人のインターンシップの受け入れ制度。それからもう1つ、直接的な外国人ではないですけども、八戸にちょっと欠けているなと思うのは留学生。多分、各校留学生いると思うんですけど、そういう人たちが例えば市民のご家庭にホームステイをして、実際に日本の文化とか日本の生活を知ることによって親近感を持って、八戸でこの先生活していきたいという思うことも出てくると思うんですけど、今ホームステイ先がなかなか八戸で見つけるのは大変なんですよ。学校と市民がちょっと離れているので、そこを行政が橋渡しをしてホームステイ先を見つけたりアレンジもしていただけるような仕組みができると、留学生がもっと八戸に親近感を持つのかなというふうに思います。私からは2点です。1つはふるさと納税、1つは外国人留学生。最終的には彼らを八戸に定着していく、そういう施策をお金の面、それからホームステイのような文化的な面、そういうところで何か制度的なものを考えていただけるとありがたいなというふうに思っています。私から以上です。

○熊谷会長（八戸市長）

ありがとうございます。何かありますか。

○事務局（見付 GL）

ふるさと納税に関しては、これまでも土屋校長先生からいろいろとお話を伺ってましたので、実際、仕組み自体は作ることが多分できると思うのでそこは検討して行って、企業版と個人版と合わせて高等教育機関の支援というのでやれば良いなと考えています。あとは、奨学金に関してもいろいろと課題はあるかもしれませんが、そこは1つずつクリアして、外国人の方にも八戸いいなと思ってもらえるような。そこは多文化共生との兼ね合いはあるかもしれませんが、そこも検討していきたいなと思っています。ありがとうございます。

○熊谷会長（八戸市長）

ありがとうございます。次に、金子学長補佐、よろしくお願いいたします。

○金子委員（八戸工業大学 学長補佐）

八戸工業大学ですけど、来年度、令和9年度から学部再編を計画していきまして、3学部体制になるということで、これに対して行政やら企業から少し意見いただいたりする場があると嬉しいなというのが1点。あとですね、12月の地震のときに、土木の専門なので個人的に感じたことですけど、市長の方も苦労されているところもあると思うんですが、いろいろと地震みたいな危機管理のときに、この産学官でもう少し協力して意思決定の支援ができるのかなとちょっとその時感じてまして、高専にも土木の先生、建築の先生もおりまして、素早く調査に行って、学会の方では調査結果出したりしてる先生もいて活躍されているんですけど、なかなか市の方とか地元の方にあまり伝わってないかなというのもありまして。もう少し危機管理のときにバツと集まれるような体制みたいなものを作っておくと、この会議も役に立つこともあるかなと地震のときちょっと思いましたので、その辺の検討をお願いします。

○熊谷会長（八戸市長）

危機管理に対して大変ありがたい御発言でございます。参考にさせていただきます。ちなみに、高専はどこを調査されたんですか。

○金子委員（八戸工業大学 学長補佐）

液状化の調査とかをして学会に出していました。

○熊谷会長（八戸市長）

港湾の方。

○金子委員（八戸工業大学 学長補佐）

いろんなところですね。学会の方ではそれが最初の第一歩みたいになっていて。清原先生ですけど。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

全市的にやっているんですね。いろんな建物が建つときにボーリングやる、民間で。

○金子委員（八戸工業大学 学長補佐）

それは僕の方でやっていますが、地震の直後は清原先生が回って歩いて。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

地下構造というか、状況を誰か先生調べていたんですよね。

○金子委員（八戸工業大学 学長補佐）

それ私です。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

要するに、実際に民間でやる建設のときのデータを集めて、八戸市内全部ですよ。

○金子委員（八戸工業大学 学長補佐）

僕のアピールをしていいのであれば、今も下水道からデータをもらいまして、下水管の危なそうなところの調査も少し全体としてバツとやって、卒業研究とかで今やっていました。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

防災関係に共有したほうがいいですよ、そういう情報はね。

○熊谷会長（八戸市長）

そうですね。

○金子委員（八戸工業大学 学長補佐）

そういう防災士の育成講座もやって。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

そうですね、防災士やっていますよね。すごく受講者増えて。

○金子委員（八戸工業大学 学長補佐）

そういうのを活かして有事のときに対応できる体制っていうのは必要なのかなと。

○熊谷会長（八戸市長）

ありがとうございます。危機管理部がありますので、そこと情報共有させていただきます。
ありがとうございます。続きまして、杉山学長よろしく申し上げます。

○杉山委員（八戸学院大学短期大学部 学長）

短大ですけれども、令和7年度の実績を見ていて、八戸地域学に本学が全く参加していないのが申し訳ないなと思っておりました。なかなか短大、授業が高校みたいにみっちり詰まっているので。これとは別に地域文化論の授業がありまして、本学は本学で短大生にちょっと合わせた内容って言ったらなんですけども、食であったり、文化であったりとかいろいろなことで、客員教授を含めて講師を呼んで、そういう八戸の魅力を伝えるっていうことはしております。そういうのをやっているっていうこともあるから、逆にこちらに参加していないというのが申し訳ないなと思ったんですが、ただ参加していないのに言うのもなんですけども、例えば高専も工大も学生がほとんど多分男子学生が圧倒的に多いということもあると思うんですが、内容に男女向きがあるかどうかっていうのは別としてですね、例えば女性の

講師であつたりとか、そういうのがあってもいいのかなと。短大でやって学生の評判が良かったのは、やはりあの女性で地域で働きながら活躍して、こういうふうに生き生きと楽しくライフワークバランスと言いますか、そういうふう to 実現しているという講師の方に、1つのモデルですよ。そういう生き方を伝えるというのも大変評判が良かったので、そういうところもあればいいかなというところはちょっと思いました。

それから、令和8年度にこれから初めてやるというUIJターンの促進のための同窓会的なところで、ちょっと内容聞いたんですが、本学の場合は保育士とか介護福祉士の養成で、関東圏に行っているのはほぼ100%保育士で、この参加企業の中に保育関係はないみたいだったので、そっちに行っている保育士をやっている学生が、こっちの保育士に移るっていうところには直接関係ないとは思いますが。ただ、もちろん転職を考えている女性も卒業生もいますし、あとちょっと聞くのは、向こうでご結婚したり彼氏がいたりして、こっちに戻ってきたい気持ちはある。ただ旦那様になる人の仕事がかっちで見つからないっていうのもあるっていうことでしたので、夫婦で保育士している場合だと今度小学校教諭の免許が弘大とかで取りやすくなったので、じゃあ小学校の免許取って、夫の方はこっちで小学校の先生になるかみたいな話もあつたりするんですが。こういう形で卒業生そのものではないですが、配偶者と一緒に戻ってくるためにこういう場が使えるととってもいいかなというところがありました。ですので、まあ参加者を集めるときに、まあそういうところもちょっと視点に入れていただけたらなというふうに思います。

あとは、インターンシップ受け入れ企業の支援ですね。やっぱりこれはすごく重要だと思っています。短大生はどちらの学科でも長期の実習に行くわけですが、やっぱりその実習先でどういう指導を受けたかとか、どういう受け入れをされたかということが、卒業後の意識付けにも大きく影響していて。行った先がとってもいいと、そのままそこでうまくいけば就職するっていうのはすごく多いです。逆に、そこであまりいい思いをしないと、保育士そのものを諦めてしまうという場合もありますし、もう地元は嫌だから東京に行くというふうなこともあつたりします。ですので、どういうふうな受け入れ態勢で、どういう指導をするかというところは、すごく重要なところだと思っていますので、こういうのが始まるというのは大変いいなというふうに思いました。以上です。

○熊谷会長（八戸市長）

ありがとうございます。次に、小林学長よろしく願います。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

今ちょっとお話し出たんですけども、実は4月からですね、今の健康医療学部で保健体育とか養護教諭の資格が取れる学科がそもそもあるんですけども。それに加えて、一定の教育関係の教科を履修して単位を取れば小学校の二種免許が取れる。これはそもそも市の教育委員会の方からの要請というか、それを受けてずっと検討してて、去年の10月ですけど文科省から認められるということになりました。

実際は、中学校・高校の保健だったり養護教諭とかはですね、なかなか実際採用されるのにはちょっとハードルが高いところがあったんですけども、実際は小学校の先生も人材不足ということがあって、それを市あるいは県の方からの要望・要請もあって、ようやく今それが4

月からの実現することになったということです。県南で小学校の先生の課程をやるのは初めてのことになるので、ぜひいろんな形でPRしてもらえればありがたいなというふうに思っています。今回の件とは関係ないかもしれませんが、ちょっとそのことだけ申し上げておきます。

土屋先生の方からお話あったふるさと納税についてはですね、なかなか競争が厳しくて、私はそもそもこの制度については反対していました、基本的に。今の交付税制度を乱すというか、本来必要な財源がどれだけ必要かっていうのを客観的に推し量りながら交付税制度であるのを乱すっていうのもそうですし、それから、納税額が高いほど恩恵が大きいわけですよ。実質、高額納税者に対する減税措置みたいな、そんなことはいいのかっていうこともあってですね、制度自体はとにかく違う形の方がいいんじゃないかっていう考えを持っているんですけども、悪法も法なので。もう1つ問題だと思うのは、ネットでこう簡単にこう見て、「これがいいな」っていう。そのときの手数料を業者がかなり持っていくというのも非常におかしいというふうには思ってますけども、悪法も法なのでやっぱり増やしたほうがいいと。そうすると、魅力的な返礼品をどれだけ集めるかっていうのは一生懸命やっておられるので何も言わないですけど、今の土屋先生の方のお話あった企業版のやつは、これ詳しくわかんないんだけど、例えば大きい会社の工場とか支店とかがあるじゃないですか。それくらいの規模の大きい会社になると、関連会社っていっぱいありますよね。その関連会社のここにはない、ここには住所がない関連会社に手伝ってもらうことはできないんだっけ。

○事務局（見付 GL）

できます。本社が八戸になれば大丈夫なので。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

だから、グループ企業があって、その関連会社に手伝ってよってというのはやれるんじゃないかと思って。これは、こっそりやってうまくいけば結構。今、お話聞いて思ったっていうだけです。

それからホームステイの関係だと、ヒップファミリークラブの皆さんが相当ホームステイを受け入れているんで、もし実際にそういう受け入れる必要があるときには相談してもいいんじゃないかって感じがちょっとありました。

あとはですね、地域おこし協力隊というのはまだ制度あるんだっけ。

○事務局（見付 GL）

あります。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

自治体によってすごい協力隊の受け入れの数に差があって。全くほとんど無視しているところもあれば、小さい町だけ何十人も入れているようなところもあって。その実態を見るとそういう面での規制というか制限はなくて、協力隊で来ますよっていう人がいればいくらでもやれるのではないかと、詳しくはわからないですけど。そうすると、ああいう人たちの何割かは地元と馴染んで残っていく。若い人だったりすると相手を見つけて結婚しちゃうとい

うようなこともあるみたいなので、そういうのもちょっと探ってみてはいかがでしょうかというか。以上です。

○熊谷会長（八戸市長）

ありがとうございます。

○事務局（小笠原課長）

地域おこし協力隊に関しましては、青森県全体がちょっと少ないということでお話があります。八戸もちょっと少ないんじゃないかというお話も県の方からありまして、活用してほしいというのは県からもお話を伺っています。で、今いらっしゃる方でも実際、地域おこし協力隊終わってからもそのまま八戸に残って活動してる方もいらっしゃいますので、そういった方々をどんどん増やせるようにしていければいいんじゃないかなということでは考えてはおります。

○事務局（谷神部長）

補足すると、この前、地域おこし協力隊3年任期迎えた方が、今年の3月に店を中心街で開店しまして、ワインとかパンとかそういったお店を開店するというところで、定着していただいているという実績が今回できましたので。今後もどんどん地域おこし協力隊については積極的に見ていきたいなど。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

小さい町でも本当にすごい人数やっているところがあるんで。八戸だと、協力隊として何をやるかについては様々考えられるような気がするんで、ぜひ誰か担当決めてやればおもしろいと思います。

○事務局（谷神部長）

あと補足で、ヒップファミリークラブの件なんですけれど、今、我々の方もまた繋がっております、実は昨日、一昨日かな。ヒップファミリーが韓国から5人ぐらいホームステイ受け入れていただいております。青森から韓国便がある関係上、ヒップファミリーさんは毎年受け入れているみたいで。ヒップさん、韓国に限らずいろんな国の交流もございますので、韓国に限らずどんどんやっていきたいという意向はありましたので、ヒップさんが青森にいる限りはそういった関係性はできているかなというふうに思っております。

○土屋委員（八戸工業高等専門学校 校長）

これはNPO なんですか。任意団体か何か。

○武輪副会長（八戸商工会議所 会頭）

多言語を勉強するサークルみたいなもので、全国組織あるんです。

○事務局（谷神部長）

その青森支部がございまして、その青森支部が今回韓国の留学生とかをホームステイ受け入れているっていう形でしたね。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

そもそも何語でも喋るということですよ。

○武輪副会長（八戸商工会議所 会頭）

7か国語って聞いてたんですけど、それ以外にももっと取り入れています。

○土屋委員（八戸工業高等専門学校 校長）

そうですか。この窓口はお聞きすれば教えていただけるのですか。

○事務局（谷神部長）

そうですね。総合政策部の中の市民連携推進課が、ファミリークラブの窓口を持っており
ますので、そこでいろいろと調整はできるかなと思っております。

○熊谷会長（八戸市長）

八戸にもいるけど、あれは青森の支部なの。

○事務局（谷神部長）

はい。

○熊谷会長（八戸市長）

わかりました。それでは、最後に武輪会頭よろしくお願いします。

○武輪副会長（八戸商工会議所 会頭）

この会議に来る直前の情報だったのでよく見てなかったんですが。私も八戸商工会議所は弘前大学とも協定を締結しておりまして、昨年ですね。具体的にどういうことをという話があったという情報を、今、会議の直前に聞かされまして。まだ会議の内部でも情報共有できていないというふうに思うんですが、ちょっとその目的の本文のところだけちょっと読んでみます。「新しい技術を取り入れたいがノウハウがない、若者の発想を製品開発に活かしたい、専門的な調査が必要だが自社だけでは限界があるなどの課題に対し、大学の知見やリソースを活用することでスムーズに解決できるかもしれません。大学は単なる教育機関ではなく、ビジネスの強力なパートナーになり得ます」ということなんですけど。この話をどうやって進めるか。今日この会議があるから、そこでちょっと発言をさせていただいてから考えましょうということになったんですけれども、そういうお話があります。それぞれ高専でもですね、昨年、発表会にお邪魔させていただきましたし、そういう高等教育機関のシーズを皆さんにお知らせするということは今でもやっていらっしゃると思います。また、八戸地域高度技術センターで研究室巡りということで、八工大、高専にお邪魔しているわけなんですけど。こういう取組でやっても面白いのかなというふうに今率直に感じましたけども、実際にやるにあたってはいろんな課題があるかもしれませんが、ちょっとその辺の情報交換ここで出させていただいて、あとは弘前大学ともやり取りをしたいなというふうに思っています。

それで、高等教育機関の皆さんにも、この地域に就職を促進するためにいろいろ御協力を
いただいておりますけども、それをPRする形の1つに、これも現実的じゃないのかもしれ

ないですけど、学園祭の活用なんかどうかなと思ってですね。学園祭で学園の紹介だけではなくて、その卒業生が行く企業のブースなんかも作ってですね、「ここの大学に行けばこういう企業と繋がっているんだな、この企業がどういうことやっているんだ」というようなことを情報発信できればどうかなと。ただ、そういうスペースがあるかどうか分かりませんが。八戸の高等教育機関、それぞれ中心街から離れたところに位置しているので、なかなか簡単に行きやすい場所ではないんですけど、そういうふうなことも行って活気を作ったほうがいいんじゃないかなという気がして提案をさせていただきました。以上です。

○熊谷会長（八戸市長）

今の弘大と学園祭の活用の件で、もし皆様から御意見あれば頂戴したいと思います。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

先ほど話の最初に話した小学校の教職課程では、実は弘大の先生にお世話になるんですよ。最終的には5人も来てもらって講義してもらうことになっていて。そういう意味で、そういう連携していただくというあれがなければとてもできない話だったので、今、弘大とそういう形でまた連携が進んでいくというのは非常にいいことだというふうに思います。

学園祭に地元企業のブースがあるっていうのは、なんぼでもありますから。

○武輪副会長（八戸商工会議所 会頭）

そんなことありえないって言われるかもしれないけど。

○金子委員（八戸工業大学 学長補佐）

全然できると思います。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

もしかしたら、学園祭っぽくこの事業をやるっていうのもあるかもしれないですね、イオンでやっていた高等教育機関のPRというのを。ただ卒業生が行ってないところには難しいかな。

○熊谷会長（八戸市長）

学園祭は人集まりますもんね。なかなか普段ちょっと離れてるから行きづらいと思いますけど。

○武輪副会長（八戸商工会議所 会頭）

どれ程度が基準で賑わっているか、寂しいのか分からないですけど。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

工大は、中心街で学園祭やっていませんでしたっけ。

○金子委員（八戸工業大学 学長補佐）

今までで1回だけです。

○熊谷会長（八戸市長）

どこでやったんですか。

○金子委員（八戸工業大学 学長補佐）

市庁前、美術館前、その辺を使って街中学園祭。50周年を記念して。来る客層が全然違います。あっちでやるときに来る人と全く違う人が街中でやると来場者になると。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

合同学園祭的なのを街中でやるというのは面白いかもしれない。

○金子委員（八戸工業大学 学長補佐）

それ、僕のアイデアですから。大変過ぎて1回でもうやらないと。やっている担当部局が多分大変みたいですけど、僕は1年おきにぐらいにやった方がいいんじゃないかなと思っていますんですけど、PRのために。ちょっとしんどいという意見が多くて、1回きりになってしまったんですけど。

○熊谷会長（八戸市長）

主体は学生になるんですか。

○金子委員（八戸工業大学 学長補佐）

そうですね。学生が主体なので、なんていうか「やれ」という言い方もしにくいので、ちょっと上手に誘導してっていう感じにしないといけないところもあるので。それもあって難しいところですね。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

今までどおりのやつと別枠。みんな出す、合同学園祭。

○金子委員（八戸工業大学 学長補佐）

そうなんですね。真面目な大学紹介みたいなものよりは学園祭っぽい、お祭りっぽい方が多分人はたくさん集まるのかなと思うんで、その中に紹介も混ぜるみたいなイメージが必要かなと。

○熊谷会長（八戸市長）

どうですか、土屋校長。

○土屋委員（八戸工業高等専門学校 校長）

学園祭、我々「高専祭」と言っていますが、我々の高専祭のターゲットは実は受験生なんです。そこに地元会社が来ても違和感はないかなと思います。ただ、もう1個我々今、田面木でやっているときのもう1つの方向性としては、地域に開かれた学校っていうのがあって、やっぱり田面木や白山台のところの人のブースがあるとやっぱりやりやすいかな、活気が出るかなという意味で。私はオープンにしていくのも大賛成です。それで集客を望めるのであれば、ありがたいなと思います。

産学連携の話ですけど、うちでもそういう部署もありますし、以前よりやってきていますけど、なかなか教員の数も少ないので、全ての御要望にお答えするのはなかなかうちだけでは厳しいというのがあります。意識してやっているのは、うちで対応できないものを周りの大学の先生を紹介したりして。本当はうちでやれるのが一番いいんですけど、相談役みたいな感じを意識してやっていて、東北大学にその専門の先生がいればそっちを紹介するみたいな。岩手大学にいればという感じで、大学の人と地元の企業の人を結びつけるような役割みたいなことを意識して取り組んできている感じなんですね。あまり地味なんで、そこが表に出てくることはあまりないですけど、そういうことはある程度やっています。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

学生が中心ですからね。

○土屋委員（八戸工業高等専門学校 校長）

教育が中心なので、やっぱり研究のところであまり時間も割けないですし、人数も少なく専門分野限られてくるので。なかなかマッチング、うちとしての完全なマッチングを図るのはなかなか難しいところもありますけど、そういうような位置付けを意識して、前は僕がその責任者で、今ちょっと代わっていますけどやってきました。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

校友会にちょっとだけ尋ねてみますかね。

○熊谷会長（八戸市長）

学園祭、短期大学と一緒にやられているんですか。

○杉山委員（八戸学院大学短期大学部 学長）

それは一緒です。元々は日が同じというだけで、別の名前で分かれてやっていたんですが、周年事業のあとは一緒にやっています。

○熊谷会長（八戸市長）

1 回ぐらいやってみてもいいのかなと。

○杉山委員（八戸学院大学短期大学部 学長）

段取りとかまで全部大学がやるのはちょっと厳しいかな。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

何周年だっけ、市制施行。

○熊谷会長（八戸市長）

100 周年が 2029 年。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

じゃあ、そのときに予算取ってもらって合同学園祭を。

○熊谷会長（八戸市長）

新年度以降ということをやらかってというのはそろそろ検討しようかなって話になっているので、今のは議事録に残します。

あとどうでしょうか。どうぞ。

○土屋委員（八戸工業高等専門学校 校長）

先ほど武輪会頭の方から弘前大学との連携というお話が出ました。我々も以前から弘前大学との連携協定を結んでいまして、我々としては学生を弘前大学に編入学させるようなことを、入しやすい試験制度の構築とかそういうようなことやってるんですけども。私、弘前大学を外から見ると、国立大学になれば非常に珍しいことに、理学部の方が工学系よりも大きい大学で珍しいんですけど、弘前大学はそういう大学で、あと工学部が非常に小さいんですよ。そういう意味からすると、例えばその地元企業との技術相談であるとか、そういうことは工大とか高専とか、それと弘前大学の工学部、そのネットワークの中でやらないと、多分いろんな分野やいろんな分野をサポートできない、カバーできないんじゃないかなと思います。ですから、やっぱりこの八戸エリアとしては、その地域企業の課題とかっていうのを吸い上げて、それが工大とか高専とか弘前大学でなければ岩大、東北大ってところのネットワークに繋げるそういうコーディネーターというリエゾンがいないと、なかなか地元企業さんから課題を吸い上げることもできないし、地元企業も声を上げることができないんじゃないかなというふうに思います。

以前、高専が持っている産業技術振興会というところで講演したんですが、研究のテーマなり、こういう共同研究できますよということをいくつも発表したんですけども、結果的に1つも地元企業さんから声が上がってこないんですね。私、同じ講演内容を東北大学でやったときには、終わったすぐ直後に3社から、3社とも1000万円単位の共同研究の申し出があったんですよ。別に1000万じゃなくたっていいんです、100万でも50万でもできる研究なんですけど、声が上がってこなかったんですよ。つまり上げ方がわからない、どうしたらいいかわからない。まだギャップがあるんじゃないかなと思うんですね。それを詰めてあげることによって地域の課題解決、それから学校の学生と教員の活性化に結びつくのかなというふうに思います。すぐというわけじゃなくても結構ですけども、やはり地域企業の声を聞く、高専や工大や弘大と繋げていくような、そういうリエゾン機能をどこかで考えていただければありがたいなというふうに思います。

この前の日曜日ですけど、アマゾンが地域企業の課題を取り上げて、その地域企業の課題に対してどういうアイデアがあるかっていうのを半年間ずっとサポートする、「アマゾンAWS」という会社があるんですけど、そこがお金出してずっと半年間その支援をした発表会があったんです。地域企業、介護の会社さんがどうやってネットワークシステム作ったらいいとか、いろんな課題が出てきたのを、高専生が解決して新しいプログラムだとかサービスだとかを提案していくっていう、そういうイベントを半年間やって発表会があったんですが、すごい面白いアイデア出てくるし、現実企業もこれで開発に持っていったっていいよっていうようなものも出てきているし、やっぱり若者は新しいこと考えるし、地域企業もそれなりに問題点持っているんですよ。そういうアクションをやっぱりいろいろ積み上げていくと地

域も活性化するし、若者もなんか俄然やる気が出て、じゃあ八戸に残ってみようかなって思うんじゃないかなと思います。武輪さんのお話、非常にやっぱり基礎になっていて刺激的な話になると思います。それをこの会議なり行政が、うまく救い上げる機能ができてくるとありがたいなというふうに思いますけども。

○熊谷会長（八戸市長）

ありがとうございます。今の御意見に何かございましたら。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

弘大行ってきた話をしたんですけど、やはり非常に地域に貢献したいという、いろいろお話をさせていただいたんですけど、そういう意向とか思いは非常に強かったですね。離れてはいますけども、八戸の地域に貢献するということについては非常に意義のあることだというお話をされていました。

そもそも去年の2月に中教審の答申があって、地方大学をこれから支援していくという方向性が、答申が出されたんですけども。その中で、ただ単に支援するのではなくて、いかに地域に貢献していく、なくてはならない存在になっていくか。大学、高等教育機関がなくなっていくことが、これから大きなテーマだという方向性出されて、そういう努力をしないところは、この少子化の中でなかなか無理ですねっていうくらいのトーンだったと思うんですよ。その貢献の仕方としては、やはり連携のプラットフォームをしっかりと作って、具体的な事業で地域に役立っているということをしっかりと構築していくということが求められるというようなことだったんで。この産学官、今の我々はそれを先取りしてるという気もしないでもないんですけども、より具体的な成果を出していくように、そういう取組をしていくのが非常に重要だというふうに思います。

○熊谷会長（八戸市長）

ありがとうございます。ほかに何かございませんでしょうか。

○土屋委員（八戸工業高等専門学校 校長）

最後に、このデータを出していただいてありがとうございました。びっくり仰天しました、このデータを見て。これ今、0歳が1000人ですよ。いや、こんなふうになっちゃうのかとびっくりしました。本当にいろいろ手を打たないと消滅しちゃう感じがしちゃいますね。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

今年の4月の18歳人口が、日本で110万人なんですよ。10年後がちょうど100万人、あと8年ですね。2024年の出生数が68万4000人。そうすると10年間で10万人減って、残りの8年間で30万人減るんですよ。だから、18歳人口ってもう生まれてきた人ですから変えようがないんで、これ現実なんですよ。

○土屋委員（八戸工業高等専門学校 校長）

すごい現実を突きつけられていますよね。

○金子委員（八戸工業大学 学長補佐）

今週頭に岩手県に行きましたけど、岩手県盛岡でもそっくりですね。岩手県の人口もほとんど同じ。

○小林委員（八戸学院大学 学長）

68万4000人も地域差がありますからね、さらに。

○金子委員（八戸工業大学 学長補佐）

北東北はみんなこんな感じですよ、秋田も大変みたいです。

○土屋委員（八戸工業高等専門学校 校長）

八戸だって、今とりあえず18歳が1800人が1000人ですよ。

○熊谷会長（八戸市長）

ありがとうございます。いろいろいただいた意見、今後の産学官連携事業に活かしてまいります。特に令和8年度の事業につきましては、令和7年度の継続というのが8本のうち6本ありますので、今日いただいた意見を活かして、よりいい事業にするようにしてまいります。

それから、危機管理に関して非常にいいお話、金子さんからいただきました。それから、八戸学院大学の福田先生の方からも協力するよというお話をいただいておりますので、またその辺のところも連携を図りながら。

それでは、以上で「その他」の案件を終わりますが、皆様から頂いた御意見については、事業検討部会で議論を進め、次回の会議にて進捗等を報告させてもらえればと思います。

それでは司会の方へ進行をお返しします。

○司会（小笠原政策推進課長）

皆様、長時間にわたり御審議いただきましてありがとうございます。それでは、これをもちまして、「令和7年度 第2回八戸産学官連携推進会議」を終了いたします。ありがとうございました。